

集団心理療法における幼児の理解



岩村由美子

○セラピー・グループのあらまし

対象 種々の問題をもつ子どもで、普通以上の精神発達を示

し、医学的検査の結果、著しい器質的異常の認められないもの。私たちの機関は私立なので、母親が「困った子」と考えて、相談にきて、このグループにはいることが多い。

年齢 年中組、年長組の子どもが大部分。

時間 原則的に一週一回。一回は一時間十五分位が標準。年令などにより、一時間から一時間半と多少は異なる。

構成 人数は五〜八名位。男女混合の時は半分ずつ位になるよ

うにする。年令は、体力差、遊びのちがいを考え、一年以上の開きのないようにしている。

(注) 年令よりも体が小さく体力がない、引込思案の度がひどく、はじめからグループではむりがありそう、脳

波に異常がある、精神発達の面で少し遅れている、などと

いう子どもは、ほとんどの場合個人セラピーを行なう。

○セラピー・ルームのあらまし

遊具 乗物、人形、クレヨン、絵具、大型積木、折紙、はさみ、糊など、ふつうに幼稚園や家庭でみられるもの。ガラガラやおき上り人形など、一、二才用の玩具をいくつか入れることもある。

備品 大型黒板、机、椅子、ママゴト・コーナー、ドル・ハウス、洗面台。

窓のガラスは、割れにくいように金網の入ったもの。大きい積木などをガラスに向かって投げることは禁止するが、万が一当たっても、割れないように。

広さ 33 m²〜45 m²。床面は水でぬれてもさしつかえない材質。

○セラピーの場面

自分と同じ年頃の子どもが数人いる。セラピストであるおと

なが一人いる。使ってもよきそうな遊具もかなりある。そのおとな(先生)は、「ここで、自分の好きなことをして遊んでもいいのよ。だけどお友だちにけがをさせるようなけんかをしたり、机やいすをこわしたりしてはいけないの。お遊びの時間はいつも×曜日の×時から×時までなの」というだけで、これをしようと誘ってはくれない。

私は、V・M・アクスラリンの遊戯療法に、大きな影響を受けた。彼女は遊戯療法の八つの基本原理を挙げている。参考までに引用しておきたい。(「遊戯療法」小林治夫訳岩崎書店刊より)

- 1 治療者はできるだけ早く、よりラポート(親和感)ができるような、子どもとのあたたかい親密な関係を発展させなければなりません。
- 2 治療者は子どもがあるがままに受け入れられます。
- 3 治療者は、子どもが自分の気持を完全に表現できるように自由感を味わえるようにその関係におおらかな気持を作り出します。
- 4 治療者は子どもの表現している気持を油断なく認知し、子どもが自分の行動の洞察が得られるようなやり方で、子どもの気持を反射してやります。
- 5 治療者は、子どもにそのようにする機会があたえられれば、自分で自分の問題を解決しようとするその能力に深い尊敬の念

をもっています。

- 6 選択して、変化させる責任は子どもの責任です。治療者はいかなる方法でも、子どもの行ないや会話を指導しようとしません。子どもが先導するのです。治療者はそれに従います。

- 7 治療者は、治療を早めようとはしません。治療は緩慢な過程であって、治療者はその緩慢な過程であることを認識しています。

- 8 治療者は、治療が現実の世界に根をおろし、子どもにその関係における自分の責任を気付かせるのに必要なだけの制限を設けます。

○子どもたちの変化

お互いに知らない子どもたちと私がブレイ・ルームにはいる。すぐに玩具で遊びはじめの子もあり、何回かただつ立って友だちの遊びを見ているだけの子もいる。最初は、この場所やそこにいるおとながどういうものなのか充分につかめず仲間もお互い親しくないもので、遊びは長つづきしないし、密なグループ関係ももちろんできず、ある玩具をAもBも使いたい時などは、AはしばらくBの動きをみていて、Bがちよっと手はなした間にさわってみる。今度はBがAの動きをみていたといったふうに、けんかもせず、ごく普通に遊んで帰って行く。

そのうちに、この場がどんなものか、というより、かなり

自由に動きまわられる場面であり、評価のない、今まで自分の経験の中には見当らなかつた場面らしいと感じ出すと、そろそろと、自分の気持や考えを表情や遊びの中に出しはじめ。「××描こうかな。うまくかけるかな」と独語している子。私は「上手にかけるかどうか気になるのね」という。「ねえ、先生、これ下手でしょう」と本当は上手だと私にいつてもらいたそうに折紙などを作って持ってくる子。「上手か下手か先生にいつてほしいのね」という。「AちゃんはBちゃんのもの取つたよ」と告げ口にくる子。「そう、あなたはいけないと思うのね」粘土を節分にまく豆にして、小さくちぎって撒いて、にやっと笑って、私の方をみる子。「粘土、お豆にして、たくさんまいたの」と返す。

だんだんに、乱暴な行動や、甘え行動などがとても目立つようになる時期がやってくる。見方をかえれば、治療者というおとなをためすと同時に、今までできなかったようなことをして、自分の強さをためしていく時期でもあると思う。ちょっとした失敗を仲間から笑われて、机の上の玩具を全部力づくで床におとそうとする子に「皆に笑われたから、いやだったの？」という。「ちがうよ、これおとすんだよ」といいながらも、強さや速度が鈍る。大型積木で大きい家を作って、体当たりして「嵐の家が倒れた！」と大ききずする子。人形にクレヨンをぬりつけたら、水につつ込んだりする子。「Cちゃんは、今日は

赤ちゃんお人形好きじゃないのね」と言語表現してみる。「ウン」とうなずいたり、それにつづいて、妹のことなど話すこともある。セラピストのひざに坐りたがったり、セラピストが他の子の依頼を引きうけられない位に、次から次へと大きい声で要求を出す子。「Dちゃんは、今日は、先生が他の人のことするといやらしいわね。Dちゃんのことだけしてほしいの——でもEちゃんもさつきから待ってるからね」と、なるべくDにだけ聞かせるような場面をとらえていう。このころは、プレイ・ルーム以外の場所でも、これに似た行動がみられて母親の中には、不安や不満をのべる人もあり、カウンセラーは説明したり、受けとめたりしなければならぬことが多い。

治療も終りに近づいたなど感じさせるのは、次のような行動がみえはじめた時である。今までグループ活動にはいれなかつた子が、お父さん役がきまり、お母さんもきまり、子どももきまつた後で、自分から「ぼく、犬」と四つんばいになって、ワンワンいいながら、ドル・ハウスの方へいく。「そう、Fちゃんは、犬になって皆と同じ家にいるのね」と、皆と一緒になれたことを認めてあげる。セラピストに、水をかけにいこうかと二人の男の子が相談していると、Gは、「とんでもないこという奴だ、だめだぞ」と発言し、二人も他の方へ転換していく。けんかした子が帰りがわに、「ぼく、きょう、けんかしたね」「そうね、H君としたね。そして二人とも泣いちゃったね」と

いうと「ウーン」と深くうなずいている。

○セラビイ場面を経験することの必要性

いうことをきかず反抗ばかりする、妹や弟をいじめて困る、発言力が乏しい、吃る、すぐ泣く、すぐ腕力をふるう、などの問題のある子は、このような特殊な場面を経なければ、本当の自分^々を見つけ出せないかという、そうではない。幼稚園でも、家庭でも、このような子どもが、いい適応の状態になれる場面はたくさんあるし、またその場面を作ることでもきょう。

セラビイを行なうことが良いと考えられるのは、どんな点か。グループが幼稚園よりは、はるかに小さいこと。これには二つの長所があると考える。一つは大きい集団に圧力を感じる子どもには良いのではないか。他の一つは子どもの家族構成などをつかんでおきやすいこと。これは、遊びの中で子どもが表現するものが、子どものどの生活を指しているのか知る上に重要だと思う。お父さんとお母さん人形のいい争いや、結婚式や、お母さんがいつか自分にくれた親切などを、子どもは遊びの中で言語と行動で再現していく。自分の気持を充分表現できる時間を経験することは、何人かの子どもには、問題解消までの時間を短くすると考えてもいいだろう。

セラビイの場面というのは、かなり自由な場面である。しかしそれは、模型的にいうとかなり広いが、二種類の柵で囲まれているのではないかというふうに私は考えている。それは乗り

こえてはならない柵と、乗りこえねばならない柵であり、二つの重なりあっている所もある。その柵までの距離と、柵の高さは、セラビイにくる子どもの場合には、一人一人の個人差のとて大きいものだと思う。(五才児だから、これ位のことができるというふうに考えられないということだ) 乗りこえてはならない柵というのは、度数は非常に少ないが治療者が積木を投げることを禁止する時は、子どもはそれを必ずきかねばならないといった強いものであり、よく店前などでみかける、だだをこねれば、自分のいい分が通るような柵ではないということであり、乗りこえねばならぬ柵というのははけんかをする、痛い、泣く、だがそこにいるおとなは「二人とも、それが使いたいのね。でも、もうけんかはやめましょう」と二人を離すだけで、兄弟げんかのように、自分が小さいから有利にもならないし、祖母のよくするように、自分の気持を慰めてくれるような発言もない。痛み、悲しさ、憎らしさ、などは一人で整理して耐えねばならない。

子どもにとってセラビイの過程は、自分に対する安全性、確実性、自信といったものを獲得し、高めていく過程であり、この柵の高さや強さを、子どもに適するように設け、子どもの内部の成長につれて、その柵を、社会的に認められるものに近づけていくことが、セラビイの果す役割だと考えている。